＜コラム＞

エイムズ唯子の「心理学の周辺」

最終回：「レッツゴー！のススメ」の巻

大ヒット中の例の映画を見るかどうか、迷っていた私。決め手になったのは沖縄から遊びにきていた友人の言葉でした。「甥っこと姪っこが、熱唱しているよ」。「アナと雪の女王」の劇中歌「ありのままで～Let it go」のことです。YouTube で検索すると、雪山で歌うお姫様のアニメ画像。彼女は自分が持つ特別な力をひた隠しにしていたのですが、そんな生活に疲れ果て、ひとりで生きる決心をしたようです。悲しげに歌い始めますが、みるみる元気になって足を踏み鳴らし、両手を広げて「私は自由よ、少しも寒くないわ」と自分が作った氷のお城に入ってドアをバタンとしめてしまいます。どこか猛々しさすら感じさせるこの歌が、なぜこんなにヒトビトを動かしているのだろう。実際に映画を観に行きましたが、その疑問は解けなかっただけでなく、しょーもないことに、私自身がこの歌にハマってしまいました。

東京高田馬場にて

雪の女王エルサは、雪や氷を自在に作り出す力を持っています。子どもの頃、妹と魔法を使って遊んでいたところ、誤ってけがをさせてしまい、両親によって人と関わらずに生きることを命じられて大きくなったのでした。この7月に「きょうだいの育て方」という本を出した私としては、エルサとアナの姉妹が、親の意図によって引き離されて育ちながらも最後にはきょうだいとして手を差しのべあう物語が耳目を集めていることは見逃せません。「レリゴー！」の心理にも大いに興味をそそられたのです。

考えてみれば、人間が「ありのままに生きたい」のは当然です。体もこころも常に裸でいられたら「ちょー楽」だしお金もかからないでしょう。それを力強く肯定するメッセージを、あんな上昇音階にのせて歌いあげられたら、だれだって心が傾きます。けれど、氷のお城でひとりのびのびと暮らすエルサだって、お腹も空けば、トイレにも行くでしょう。やがて年を取り、人の手を借りなければ、生きられなくなるはずです。みんながすべてをレリゴーする社会が、仮に実現してしまったら？そこは、だれもが自分のことしか考えず、自分だけではとうてい解決できないことが山積みになるのを呆然と眺めているような、カオス（混沌）社会です。

とはいえ、私自身を含め、レリゴーレリゴー♪と気持ちよく歌っている人たちが、そんな社会を望んでいるはずもありません。エルサが自分に与えられた特別な力の存在を受け入れ、それを堂々と表現しようと目覚める姿に憧れ、共感しているだけなのです。私らしく生きるとは、どう生きることなのか。それは一生かかって答えを出すような問いでしょう。つい、若いエルサのように、性急に答えを出したくなるのですが…。きゅうくつな日常が嫌になったら、そのときは、レッツゴー、旅にでましょう。山でも海でも砂漠でも、芸術に出会う小さな旅でも。あなたをつかの間でもレットゴー（解放）してくれるなにかが見つかるはずです、きっと！

（高崎健康福祉大学准教授、フォーラム共同研究者）